



Title	Willa Catherにおける音楽について : 二つの作品を中心に
Author(s)	竹中, 靖治
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 52-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98963
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Willa Cather における音楽について

——二つの作品を中心に——

竹 中 靖 治

I

一つの有力な文化圏として独自の性格を可成り明白に打ち出してきた現代米国においてさえも、旧大陸の伝統的文化に対する一般米国人の complex を全面的に否定することはできないであろう。文学において、こうした米国人に特有な complex に悩み、それをテーマとして書き続けた一例が他ならない Henry James であるが、彼より一世代後に生れ、しかも文化的未開地に育った Willa Cather は、文化との関係において James の場合 以上の深刻な問題意識を経験していたことは想像に難くない。Cather も James 同様自分の周囲の文化的伝統の欠除を痛感することから旧大陸への憧れを刺戟されたのであり、またその関心も単に英国とその文化に限られず、広くフランス、ドイツ、スカンディナヴィヤ等にも向けられていた。中でもフランスはそのカトリック的伝統の故に宗教的な要素を多分に持つこの作家を一段と強く惹きつけた国であった。

ところで Cather におけるこのような旧大陸文化への傾斜の中にあって、彼女に特徴的なことはその音楽芸術への深い共感と理解であり、それは特に英米の作家群にあっては稀有な迄に本格的なものといってよく、正面から音楽家をテーマにした二作品、*The Song of the Lark* (1915) と *Lucy Gayheart* (1935) を彼女に産み出させているのである。そうして今特にこの二篇に注目する理由は、作品としての完成度はともかく、この二篇において Cather が文学と並んで最も深く傾倒した音楽芸術を通じて非常に明白にその人間観、芸術観を披歴しているということである。Cather にあって音楽は彼女の他の重要なテーマである「開拓者の生活」や「宗教」と共に、彼女が先輩 Sarah O.

Jewett の忠告に従って自分がそれによって真実を語ろうとした最も熟知した世界であった。

II

音楽芸術に関する限り米国は今世紀に至る迄後進国性、新開地性を脱することができなかったと見ることができよう。例えば、Boston, New York, Philadelphia, Chicago 等などのいわゆる major orchestra はようやく今世紀の五十年代になって New York Philharmonic の常任指揮者 Leonard Bernstein の登場を見る迄は、血統的にはともかく、純粹に国産の指揮者を持たなかったのであり、現在（1965）においても上記の他の四つのオーケストラは全部欧州生れのマエストロに指揮台を占められているのである。従って Cather が Nebraska の田舎町から Pittsburg や New York に出てきて、初めて本格的な音楽芸術に触れることができた世紀の変わり目前後の時期においては、音楽活動の主導権は大巾に欧州人に握られていたことは勿論である。しかも時代は音楽史的に見ればいわゆる後期浪漫派の熱風がまださめやらず、Wagnerism は依然として風靡しており、その運動の中核的勢力であるドイツ系の音楽家が巾を利かしていた時代であった。このドイツ人が英国を指している言葉、‘das Land ohne Musik’ は実は当時の米国、特にその地方にこそより応わしいものであり、*The Song of the Lark* のヒロイン Thea Kronborg が、‘I’d like to go to Germany to study, some day. Wunsch says that’s the best place you can really learn.’ と口走るのを、Thea の初めてのピアノ教師であるこの Wunsch がドイツ人であるとの理由で、単なる我田引水であると受け取るのは誤りであろう。むしろこの Thea の言葉は当時の欧米社会の音楽的客観情勢をほぼ正確に表わしていると考えられるのである。Thea 自身がスウェーデン系であり、Wunsch を下宿させているのが Kohles というドイツ系夫婦で、この二人も Wunsch もともすればドイツ語が口をついてでしまう程未だドイツ生活の臭味を身につけている人物達なのである。また Thea が出て教えを受けるのがハンガリヤ人の Andor Harsanyi であり、この Chicago

Chicago 修業時代に知り合いになりやがて Thea を愛するようになるのがビール会社経営者の息子 Fred Ottenburg で、彼は太西洋を股にかけ、欧州では未だ存命中の大作曲で指揮者の Gustav Mahler と個人的な会話を持ち、また自分でも声楽を勉強するというドイツ系の一つの見本のような人間であり、さらに Thea が最後に本格的修業のため出掛るのがドイツ本国であって、そこで彼女は恐らくこれまた実在の名歌手 Lotte Lehmann 女史の指導を受けるであろうことが暗示されている。一方 *Lucy Gayheart* ではヒロインの Lucy 自身の父親が Bayern 生れの時計屋でフルートの嗜みがあり、Thea と同じ Chicago での修業時代の中心人物 Clement Sebastian はイタリア人の歌手である。さらに音楽専門家以外では、Thea がある音楽会で手を取り合って感動を分か合っているところを目撃する貧乏夫婦がドイツ人であり、Lucy の場合には、ドイツ・リードの夕べに集った少数の高級なファンがすべてドイツ人とユダヤ人で占められており、Sebastian が好きな Minneapolis の素人合唱団にはドイツやスウェーデン系が多く、彼等は職業的には鉛工や銀行員や洋服屋であるが、何れも心の底からの音楽好きで、それによって生きる力を与えられているところの真に音楽的な大衆なのである。以上のように両作品を通じて認められる音楽的環境のヨーロッパ的、そして特にドイツ的、濃度の高さは、作者 Cather が特に意識して自己嫌惡的に Anglo-Saxon 系の人間を疎んじたとか、徒らな欧州崇拜熱から欧州大陸系人間を作意的に多く登場させたことから起っているのではなくて、むしろここに示されているのは当時の米国の音楽的環境というものの可成り正確な断面図であるといえよう。それは換言すれば、*Wagner Matinee* の Georgiana おばさんが音楽会が終っても仲々帰ってゆく勇気の起らなかった原因をなす Nebraska の当時の非文化的、そして特に非音楽的環境を裏面に持つところの断面図なのである。

III

Cather の生長過程を見ると、彼女の美意識と人間への興味を初めに目ざめ

させたのは Nebraska の大自然とそこに展開する欧州の様々な国からやってきた移住開拓民の生活であるだろう。自然への愛は Cather の終生変らなかった特質であり、自然は彼女にあっては旧大陸文化に劣らない豊かな靈感の泉でありまた激励者でもあった。次に考えられる文学は、たとえ Nebraska の田舎にあって、彼女のそれへの欲求心は可成りな程度に満足させられていたであろうと思われる。しかし事本格的な芸術音楽への接触となると、これはⅡで述べたことから想像せられるように、大都市以外では非常に困難なことに違いなかった。従って Cather と音楽の関係を見る場合、音楽的文化圏としての旧大陸と音楽的後進地としての米國という落差関係の中に、さらに都市と田舎というもう一つの落差関係を生じてくるのである。多感な思春期の少年が感激のない退屈な地方社会での生活に耐えかねて、きらびやかな都会での数日間の生活にわが身を燃焼させるという筋の物語 *Paul's Case* は田舎者の都会生活に対する憧れを象徴するものとして、それはやがて *The Song of the Lark* における田舎者 Thea の Chicago に代表される文化への、さらには音楽文化の国ドイツへの、憧れとして転生するのである。しかし Cather は単なる浅薄な都市文化の讃美者であるわけでは勿論ない。Thea がドイツにおける修業の後 New York の Metropolitan Opera House で錦を飾った頃、昔の恩人 Doctor Archie と交わす言葉には Cather が Henry James とは違った 'European Virus' の克服の仕方を見出していることが分るのである。'There are standards we can't get away from.' / I don't believe we should be any happier if we get away from them.¹⁾ また新しく誕生した歌手 Thea を Archie よりも先にきいて知っていた Fred Ottenburg は、Archie が Thea の声を初めてきこうとする前の不安な気持ちを訴えて、自分にはその声は初めてきくように聞こえるだろう、というのに対し、'You'll know it, if you ever knew it. It's the same voice, only more.'²⁾ といて安心させてやるのである。Paul も Thea もそれぞれの町を嫌悪しなければならなかったのは単に彼等の町が大

都会でなかったからではない。Paul が嫌いな自分の住む町の Negley Avenue や Cordellia Street——そこはすべての家が同じ造りで、中程度の実業家が子沢山の家庭を持ち、子供達はみんな日曜学校に通ってキャティキズムや算術を習い、彼等の家が互いに似ているのと同じように彼等自身も互いに似たり寄ったりで、彼等を取巻く退屈さとうまくマッチしているそんな町なのであるが——は即ち Thea にとっての Moonstone であるわけであり、そこでは特に自分の家の一番年長の姉 Anne は因襲的、没个性的、規格的なこの町の暮らしのあらゆる点での象徴的存在なのである。そうして Thea はこの姉の象徴するすべてのものを ‘natural enemy’ と呼びさえするのがある。しかし Paul にしろこの Thea にしろ、その激しい反撥心はそれと裏腹に個性的であることへの強い欲求を抱えているのであり、特に Thea にとっては個性的でない生活などは生きる価値のない生活と感じられるのである。先に挙げた Thea や Fred の言葉から、善かれ悪かれ人間は、そうして特に個性によって生きなければならない芸術家は、精神的に自分の故郷を捨てられるものではないというのが Cather のいわんとすることであると考えられよう。故郷とは否応なしに、いわば烙印となって人間の個性や精神の一番奥深いところに根を下したものであり、それから切り離されることは根なし草のようなものになることであるというのであろう。ここから Cather の個性観はさらに進んで、人間を真に生かす道はその人間の個性的なものを最大限に発展させる方向にあると考えるのであるが、それは今は歌手となって過去を振り返る Thea の言葉に明白に表明されていると思われる。‘I am more or less of an artist now, but then I was nothing else. When I went with you (i. e. Archie) to Chicago that first night, I carried with me all the essentials of all I shall do, The point to which I could go was scratched in me then. I haven’t reached it yet, by a long way.’³⁾

個性的であることに大きな価値を見出す精神は浪漫的な人間観といえるが、

それは今 Cather にあっては音楽芸術や音楽家という具体的視点に位置付けられることによって、没个性的、規格的、因襲的なものに対する真向からの否定と対決を通しての偉大な個性、即ち大芸術家、大歌手、の創造に向っての積極的な姿勢となるのである。そうして Thea は Cather の理想とする生き方の具現者、実践者として先づ Chicago へ、次いで遠くドイツへと歩を進めるのである。*Paul's Case* の場合には多分に絶望的、破滅的な憧れの対象であり、田舎からの一種の逃避の場として退廃的にさえ描かれていた都会やその文化が *The Song of the Lark* においては建設的な人間的努力の場となるのである。

IV

個性重視という浪漫的人間観、芸術観を持った Cather は、それでは、個人の内部における個性や才能の自覚を音楽との関連においてどのように見、どのように描いているであろうか。M. R. Bennett によれば、¹⁾ Cather は 'great vocation' というものを持つ人間がこの世に存在するという。そうして、その一例として現代の大バイオリニスト Jascha Heiftz を挙げている。この 'vocation' という言葉に必ずしも Cather の宗教的側面を思い浮べる必要はなく、それは芸術家の持つべき使命感を表わす言葉として *The Song of the Lark* の作者に極めて適わしいものであるといえよう。また Bennett は別に Cather の言葉として、偉大なのは芸術における 'desire' であり、それが如何なる種類の芸術であっても自己表現のためには外部に出なければ承知しない明瞭なある強制力である、²⁾ というのを紹介しているが、Thea の最初のピアノ教師 Wunsch も全く同じ言葉を使って Thea に教えるのである。'Nothing is far and nothing is near, if one desires. The world is little, people are little, human life is little. There is only one big thing—desire. And before it, when it is big, all is little. It brought Columbus across the sea in a little boat, ³⁾ und so weiter.' ここで Wunsch がいう 'desire' の

大きい者とは Cather のいう great vocation を持つ人間のことであろう。このことは別に Wunsch によって違った表現によって繰りかえされている。

‘Some things cannot be taught. If you not know in the beginning, you not know in the end. For a singer there must be something in the inside from the beginning……yes, when you are barely six, you must know that already. That is the beginning of all things ; *der Geist, die Phantasie*. It must be in the baby, when it makes its first cry, like *der Rhythmus*, or it is not to be…Oh, much you can learn! *Aber nicht die Americanischen Fräulein*. They have nothing inside them……They are like the ones in the *Märchen*, a grinning face and hollow in the insides……what make the rose to red, the sky to blue, the man to love——*in der Brust, in der Brust* it is, *und ohne dieses giebt es keine Kunst, giebt es keine Kunst!*’⁴⁾ Wunsch がこのように色々言葉を変えて言っていることの意味は音楽乃至は芸術の資質が先天的なものであるということの他に、それを所有している人間におけるある可能性の自覚、即ちやがては ‘vocation’ と呼ぶに足るものの萌芽を自分の内部に所有しているという確信にも似た予感が存在するということであろう。そうして ‘desire’ とはそういう自覚の激しさを体験的に表わした言葉と解されよう。この老ピアニストが、アメリカのお嬢さんは駄目、彼女等の内部は空である、という時、それは取りも直さずⅡに於て指摘した様に、独自の文化的、音楽的伝統の欠除の中に因襲に埋没してしまって無感動なアメリカ人の群像——Thea を Moonstone から訣別させたあの没個性的、規格品的な人間達——しかも Wunsch の様なドイツ人の目から見た場合の一層痛切な思い——を示しているのではないであろうか

ところで Thea においては自己の vocation の自覚は Moonstone 時代から既に序々に進行しているのが認められる。先の Wunsch の言葉にもそれを暗示するようなところはあるが、故郷の町での Thea の最も良き理解者、後援者である

vocation への不動の信念とそれに殉ずる決意がどうして可能なのであろうか。そうしてこの Thea と同様に Harsanyi 自身も十五才の時に、また *Lucy Gayheart* の Lucy も Schubert Abend の聴衆となった時、新しい世界が目の前に開けるような revelation の瞬間を体験するのである。Wunsch はかつて Thea に向っていった。‘I won’t say that you can have everything you want—that means having nothing, in reality. But if you decide what it is you want most, *you can get it.*’⁶⁾ vocation の自覚とはこのように唯一つの道のために他のすべてを捨てることなのである。実に Wunsch のこの言葉にこそ作者 Cather が求道心ともいふべき芸術家としての厳しい自己の信念を託しているかのようである。彼女は自身の体験からであろうか、人がそのような決意を行う前提として、先に触れたような百八十度の価値観の転換を必ず自己の心の中に体験しなければならないことを両篇の二人の主人公を通じて示すことを忘れなかったのである。この種の体験後の自分を Lucy は次のように感じている。Since then she had changed so much in her thoughts, in her ways, even in her looks, that she might wonder she knew herself—except that the changes were all in the direction of becoming more and more herself……It was as if she had found some authority for taking what was hers and rejecting what seemed unimportant.⁷⁾ ここに示されている Lucy の体験を要約すれば、このような大覚醒は自分の本質や個性の発見であり、同時に芸術的判断力、趣味の確立といえるであろう。

V

個性主義者という形で表わされている Cather の浪漫的資質が、これまた最も浪漫的芸術と称される音楽に惹かれていたのは不思議ではないが、さらに Cather の音楽的関心が声楽中心であることは一層個性主義者としての彼女の面目を表わしているといえよう。何故なら、声楽は音楽の中でも最も容易に個

性的であり得るからである。Lucy が, Sebastian が *Die Winterreise* を唱う時, この歌曲集がそれ程偉大であり得るのは多分に Sebastian の芸術に負うところがある, と考えるあたりは Cather のそうした個性観を明白に示したものと見える。Cather は作家を演奏家にたとえ, 創作と作家の関係を曲とバイオリニストとの関係の中にも見ているが¹⁾, この Lucy の場合勿論バイオリニストを歌手に置きかえてみても不都合は生じない。また Pittsburg 時代から Cather の親友である音楽的趣味の高いドイツ系米人 George Seibel 氏の見るところでは, Cather は音楽や楽器そのものには余り関心はなく, 音楽を再創造するところの演奏家や歌手の方に多くの注意を向けていたと伝えられているのは, 上の Lucy の見方を通して伺われる個性主義者 Cather の音楽観をよく裏付けているといえる。こうした Cather にとってオペラこそはその演劇性と相まって正に恰好の衣裳を具えた芸術形態であったに相違ない。*The Song of the Lark* において作者は Thea を取巻く多くの人物に声の個性味というものについて語らせているが, Cather にとって声は人間の精神や個性そのものでなくてはならなかった。Thea の歌唱に関する Mahler の評語をもととして Fred Ottenburg が Doctor Archie に伝える言葉, 'It's the idea, the basic idea, pulsing behind every bar she sings. She simplifies a character down to the musical idea it's built on, and makes everything conform to that. The people who chatter about her being a great artist don't seem to get the notion where *she* gets the notion. It all goes back to her original endowment, her tremendous musical talent.'³⁾ は取りも直さず Cather が作家として理想とする芸術的実現, 特に内容と形式の関係についての考え方を表明していると思われる。

作家としての Cather が一般に他の如何なる点にもまして記憶されるのは, 言葉の厳格な撰択による透明簡素なその文体によるが, (このことが *The Song of the Lark* においてどれ程実現されているかは今は問わないとして)

このことを以って作家 Cather の本質を見誤ってはなるまい。Cather の資質の傾向が浪漫的であることは既に述べたようにその個性信仰と音楽への共感によっておよそ示されているが、彼女自身の直接の言葉としてこの点に関する決定的なものが次の引用に見られよう。

To me the one important thing is never to kill the figure that you care for, for the sake of atmosphere, well-balanced structure, or neat presentation. If you gave me a thousand dollars for every structural fault in My Antonia you'd make me very rich. I know they are there and made them knowingly, but that was the way I could best get my squint at her. With those fault I did better than if I had brought them together into a more perfect structure. Sometimes too much symmetry kills things.⁴⁾

上に語られているのは作品の構成についてであって、文体そのものに関してではないが、更に大きな視点に立てば、それは内容と形式に関する Cather の一般的発言として受け取ることを許されよう。さらにまたこの点に関して M. R. Bennett が Cather 自身の言葉で綴った、What the “born artist” gets is an emotion that he wants to put into a design……“It may tease him for years until he gets the right form for the emotion”……A writer's own interest in the story is the gauge which measures the amount of warmth which will repeat itself in the reader. This emotion she found “bigger than style.”⁵⁾ という評語には紛れもなく Cather の芸術的創造に対する根本的態度が指摘されていると考えられる。元来浪漫的なものは純粹であればある程その芸術的表現には厳格な形式を必要とするものである。最も浪漫的本質を持つ音楽が本格的なものとして芸術史上に登場するのが他の芸術に比べて非常に遅れたのは、一つにはその本質上、音楽が自らをそれによって表現すべき

形式を仲々発見できずにいたという本質上の事情によると解せられる。この浪漫的な芸術である音楽の中でも特に音楽史上浪漫派と称せられる作曲家の一人 Robert Schumann は Thea の先生 Wunsch が若い時に愛した作曲家なのであるが、当時は Schumann に対する好みは ‘youthful waywardness’⁶⁾ などと見なされていた。しかしこの評語は作曲家 Schumann 自身の一つの大きな特質でもあろう。事実 Schumann の音楽の世界は屢々最少限の形式に辛うじて支えられ、自己解体寸前のきわどい姿の中に捉えられた奇妙な魅力をたたえている。しかし同じ浪漫派作曲家群の中でも Johannes Brahms のような存在もあるわけである。周知のように彼は資質的には師 Schumann に劣らないロマンチストであったが、強固な古典的形式によって己れを規律し、浪漫的恣意と散漫を克服して、深く沈潜した内面性を持った重厚な芸風を築いている。勿論文学と音楽とは創造過程の実践面においてはそれぞれに異った独自の問題が存在することは事実であるが、内容と形式という芸術上の本質的な問題はジャンルの差を越えて共通の視点において論じ得ることも事実である。

Cather には、冒頭で触れたように、Henry James の他に一生涯私淑した作家として Gustave Flaubert と Robert L. Stevenson がいるが、このことは Cather の 資質的傾向を考える上で、また Cather の芸術観の重要な一端としての内容と形式に対する見方を知る上に極めて暗示に富むものといえよう。何んとなれば周知のようにこれらフランスとイギリスの両作家は共に文章道の達人である一方、共に心の奥底に燃えるような浪漫的気質を秘めていたからである。

Chicago に出てきた Thea が Harsanyi を感嘆させたのは何よりも彼女の中に爆発せんばかりに充満している ‘desire’ であり、それは Harsanyi を初めとする人々の適切な導きによって最後には歌手としての創造的な表現形式を獲得するのであるが、この Thea における ‘desire’ はまた作者 Cather が自分の内部に蔵していたものであり、また彼女が文章という ‘design’ の中に表わすことを欲した ‘emotion’ でもあろう。こう見れば、Cather に対する Flaubert

や Stevenson の関係は Thea に対する Harsanyi, さらには Lucy に対する Sebastian の関係に置き換えることができよう。しかし Cather にあって先づ重要なのは、それが 'desire' と呼ばれ '*Phantasie*' と呼ばれ、あるいは 'life' と 'passion' と呼ばれようと、表現するに足る価値あるものを人が自分の内部に所有しているかどうかということであった。IVにおいて Thea の自覚として引用したものの中⁷⁾には、実は同時に芸術的創造活動における Cather のこのような内面重視の考え方がその個性観と固く結びついていることが明白に看取されるのである。Cather においては生命は外部から入ってくるのではなくて内部から湧き出るものなのである。そして、Thea の周りの芸術家以外にも、Thea の故郷の町 Moonstone の人々の中で感受性を持っている Ray や Archie, それに放浪癖のある貧しくて無教養なメキシコ人 Spanish Johnny さえもが彼女に惹かれ、関心を持ち、あるいはその将来の可能性を予感するのは他ならぬ Thea の中にある生命力や強烈な個性のためなのであった。She remembered the way Ray had looked at her that morning. Why had he cared so much? And Wunsch, and Doctor Archie, and Spanish Johnny, why had they? It was something that had to do with her that made them care, but it was not she. It was something they believed in, but it was not she. Perhaps each of them concealed another person in himself, just as she did. Why was it that they seemed to feel and hunt for a second person in her and not in each other?……What if one's second self could somehow speak to all these second selves? What if one could bring them out, as whisky did Spanish Johnny? How deeply they lay, these second persons, and how little one knew about them, except to guard them fiercely. It was to music, more than to anything else, that these hidden things in people responded.⁸⁾ Lucy は Sebastian による Schubert Abend を経験した時、自己

の本質を初めて知らされたと感じたが、このように自己の内部に潜んでいるものを引き出し、それを生き生きとした姿において示してくれるのが芸術であり音楽なのである。それは生きていくことの確認、生の流れそのものの体験であるともいえよう。そうして Lucy と同じように、Thea にも、あの音楽への開眼を経験した初めての音楽会において、この自己発見の体験が起るのである。She was too much excited to know anything except that she wanted something desperately, and when the English horn gave out the theme of the Largo, she knew that what she wanted was exactly that……the amazement of a new sole in a new world ; a soul new and yet old, that had dreamed something desparing, something glorious, in the dark before it was born; a soul obsessed by what it did not know, under the cloud of a past it could not recall. ‘soul’⁹⁾はその時初めて発見されたという個的な体験としては新しいものであり、それはまたそれが人類が生れた時から存在しているという共通的な体験として古いのである。この意味で Thea が故郷の moonstone で敵と感じる人々はすべてこの ‘soul’ 即ち、真の自分を知らない人々なのであり、彼等はまた真の意味で人間が生きるとはどのようなことかも知らないのである。

さてこのように人間が内部に持っている精神や個性なりは、音楽の場では結局音楽性と名付けてもよいものであろう。Cather が特に Wunsch の口を借りて述べていることからして、如何に彼女がこの音楽性を重視しているかが分るが、そのことは換言すれば、創造作業において、その過程に、いかなれば *poesis* の場としての芸術家の内部を、より重視するという浪漫的な芸術観を示していることであり、この過程に対するより大きな関心が勢い *The Song of the Lark* を一つの *Entwicklungsroman* に仕立てていると見られるのである。つまり、作家の内部での創造過程、——再ぶ M. R. Bennett のいい方を借りれば、emotion を表出するための right form 探究の過程——

がそのまま Thea の修業過程に置き換えられたものと見るができる。完成に到るよりは過程にあることを欲するのが浪漫的精神の一特徴であるなら、(Wunsch が Thea の誕生日に、*Linden* の咲き香る庭に彼女を誘いながらふと口ずさむ Schumann 作曲 *Dichterliebe* の中の一曲 *Am leuchtenden Sommermorgen* は何んと結末にならない結末を示しているのであろうか！^{*)} この長篇の序言で作者自身が、the life of a successful artist in the full tide of achievement is not so interesting as a life of a talented young girl ‘fighting her way,’ as we say. Success is never so interesting as struggle—not even to the most mercenary forms of ambition.¹⁰⁾ と述べていることや、Cather 自身が人に語って、‘The end is nothing, the road is all.’¹¹⁾ といったのけているのは如何にも Cather の面目躍如としたものを感じさせるが、*The Song of the Lark* の中でも Archie が Metropolitan Opera House での成功を獲ち得た Thea に向ってしみじみ語る言葉の中にそれが示されている。‘I guess I’m a romantic old fellow, underneath. And you’ve always been my romance. Those years when you were growing up were my happiest. When I dream about you, I always see you as a little girl.’¹²⁾ そうしてここには完成に到ることを恐れるのではなく、それを目指す積局な姿勢があるということで、少なくともこの一篇において見る限り、強固な目的意識に貫かれた Cather の浪漫主義はむしろ実践的理想主義ともいべき性格を帯びるのである。

確かに Thea が困難にぶかってゆく姿の凄じさは Harsanyi を驚嘆させたものであったし、また Fred の目には、あることが困難で厄介であれば、それだけの理由でそれが自分の薬になるとでも Thea が思っているのではないかと感じられる程であり、また Thea の Moonstone に対する反撥心も、そこの人々の philistinism に対するより、怠情そのものに向けられているという、

* この詩行の冒頭を Cather は *Im* としているが、これは恐らく記憶違いであろう。

むしろ道徳的な性質のものに受け取られるふしもあるが、Thea の努力に対する意欲そのものの根源はやはり結局の所その内部の 'desire' の大きさに発するものと解すべきであろう。この点に関連して Bennett が伝える Cather 自身の発言は次の如くである。In these (interviews), she readily admitted that writing was hard work, but work which she enjoyed as a tennisplayer might enjoy working his games from the common place into the smooth and expert. If one loved the work enough, it wasn't really work. Not that there wasn't a struggle in attempting perfection, but the struggle was one which stimulated.¹³⁾

Cather が生涯の親友 Edith Lewis と New York の Greenwich Village でアパート住いをしていた頃、彼女等の部屋の階上に住むドイツ人一家の娘が一つ覚えのように弾く Beethoven の Appassionata Sonata が大変気に入って、それを自分の仕事を始める合図にしていたことが伝えられているが¹⁴⁾、意志の人であったこの作曲家のしかもこのソナタの性格からして、これは全く Cather には恰好のエピソードであるといえよう。

このような Cather が単なる技巧主義者、形式主義者である筈はない。その種の人間は *The Song of the Lark* では声学教師 Bowers に、そしてまた Thea が語る同業の女性歌手において見出されよう。He (i. e. Bowers) was conscientious and industrious, even capable of a certain cold fury when he was working with an interesting voice, but Harsanyi declared that he had the soul of a shrimp, and could no more make an artist than a throat specialist could./'You (i. e. Archie) find plenty of good voices in common women with common minds and common hearts.'¹⁵⁾

Chicago の都会生活での修業に疲れた Thea を元気づけるため Fred は父の所有地である北部 Arizona に彼女を案内するが、二人がその附近の古代人の洞穴跡を訪れたある朝、水溜りで体を湿していた Thea の肩から水がこぼれ落ちた時、彼女の心を電光のように横切ったある真実があった。 The

make a sheath, a mould in which to imprison for a moment the shining, elusive element which is life itself—life hurrying past running away, too strong to stop, too sweet to lose?……In the sculpture she had seen in the Art Institute, it had been caught in a flash of arrested motion. In singing, one made a vessel of one's throat and nostrils and held it on one's breath, caught the stream in a scale of natural intervals.¹⁶⁾ また Lucy の場合にも、自分がその存在を感じていながらどうしても捉えられないものを先生の Sebastian がその音楽的表現を通して見事に掴んで見せてくれるというところの描写は Thea の場合に劣らず創造の神秘に触れていると思われる。How often she had run out on a spring morning, into the orchard, down the street, in pursuit of something she could not see, but knew! It was there in the freeze, in the sun; it hid behind the blooming apple boughs, raced before her through the neighbours' gardens, but she could never catch up with it. Clement Sebastian had made the fugitive actual possession. With him she had learned that those flashes of promise could come true, that they could be important things in one's life. He had never told her so; he was, in his own person, the door and the way to that knowledge.¹⁷⁾

Lucy が捉えようとして捉えられないこの何物かは実は Lucy 自身の心にあるのであり、それはかの Novalis のいう、到る所にありながら、どこにもないあの吉里の夢であるかも知れないのである。

VI

先にも触れたように、Thea の Moonstone の町に対する反撥は時には道德的な性質のものに思われることもあるが、より本質的にはやはりこの町の非文化的、そうして特に非音楽的環境に発するものであり、それはⅡとⅢに述べた

stream and the broken pottery : what was any art but an effort to
ように当時の米国の地方生活が一般に置かれている客観的状况に他ならなかったのである。しかも今世紀に入って、いわゆる frontier の消滅と共に、代って入りつつあったのが功利的な精神の申し子である商業主義であり、粗野、無教養ながらその逞しさや素朴な善良さの故に Cather が愛していた人々は次第に姿を消して、利に敏く富の獲得にしか関心を持たない人々の醸し出す雰囲気、即ち philistinism のそれが Cather を取り巻きつつあったのである。Thea はその様なフィリスティン達を 'natural enemy' と見なすのであるが、彼女はそういう敵が自分自身の家にもいる事を知る。それは Gus であり Charloy でありまた Anne も勿論例外ではない。Thea は勤め人の Charley が乾物部から衣料部に栄転したこと喜んでやるのも忘れて母に叱られる。一事が万事で、今後彼等のなすことはすべて Thea にとっては無価値なことであり、その逆もまた真であることを彼女は悟る。Cather が年を取るにつれて保守的、回顧的傾向を強め、またその作家としてのファイトも弱っていったのは、個人的な心身の老化ということの他に、アメリカ社会の資本主義的性格の強化にともなうところの不可避的な philistinism 跋扈のため、彼女がいわば場所¹⁾違いな境遇に立たされていたからとも考えられよう。彼女が、'The world broke in two about 1920 and I belonged to the former half.,¹⁾ という時、その latter half の支配的な性格は商業主義的、俗物的なものとも見ることができよう。そうして Cather におけるこういう推移と変化を観察する上で、*The Song of the Lark* と *Lucy Gayheart* は極めて興味ある資料を提出してくれるのである

Thea が例の初めての音楽会から大きな感動を胸に抱いての帰途、現実の町の人の群れや建物や荷車や自動車が彼女の抱いているその素晴らしい興奮や感情を寄ってかかって奪い去ろうとする。そういうものを抱えていることは世間を敵に廻すことである。しかし敵が如何に自分を締めつけ踏みにじっても自分はその大切なものを守るために敢然と戦い、それに殉じようと彼女は決心す

る。²⁾ Thea に示された Cather のこの様な激しい反俗精神と芸術への献身は更にまた他方では浅薄な教養主義の仮面を剥ぎ取り、えせ芸術家との妥協を許さないのである。Cather はいう、The women who run about from one culture club to another studying Italian art out of a text book and an encyclopedia and believing they are learning something about it by memorizing a string of facts are fatal to the spirit of art. The Negro boy who plays by ear on his fiddle airs from 'Traviata' without knowing what he is playing, or why he likes it, has more real understanding of Italian art than these ethetic creatures with a head and a larynx, and no organs that they get any use of except to reel you off the life of Leonardo da Vinci.³⁾ そうしてこの黒人少年のように無学でありながらその本物の音楽的感受性の故に Cather が愛したであろう人間の姿は、Thea がその舞踏会で歌った時彼女が肌にひしひしと感じる程の反応を示すところの Johny を初めとする貧しいメキシコ人達や、Lucy の先生 Sebastian が進んで参加する Minneapolis の素人合唱団員——彼等の大部分は音楽が心の底から好きでそれを生活の糧にしているドイツ人やスウェーデン人の労働者なのである——の中に見られよう。一方これとは逆に、浅薄な教養主義者の場合と同じように、えせ音楽通に対する批判を Cather は忘れていない。Sebastian の口を通して、"Mendelssohn is out of fashion just now. Who is the fashion? Debussy, I suppose? You've noticed that people are interested in music chiefly to have something to talk about at dinner parties?"⁴⁾ と皮肉らせているが、さらに Thea の場合はそのえせ芸術家に対する非妥協的態度には凄じいものがあり、great vocation を持つ人間の厳しさを痛切に表わしている。人は何か偉大なものを、そのために捨てるべきもののすべてを捨てられる程激しく愛している場合、同様に激しく、安物、えせ物を憎悪しないではおれない。自分がえせ物として軽蔑する芸術家を喝采する聴衆は自分を舞台から⁵⁾ 次り出すのが当然である、と Archie に語る Thea であるが、彼女のいわゆる 'creative hate'こそ great vocation を持つ芸術家が宿命的に持たなければ

ばならないものではなからうか。Thea によればそれは芸術家に火の中にも飛び込ませる勇気を与え、自分にも信じられない程の偉大な飛躍を可能にさせるものなのである。そうして Thea は *Walküre* の *Sieglinde* の代役を咄嗟の決断で引き受けるという行為によってこれを実行して見せるのである。この作品で Cather が最も強く示そうとしていることの一つは、芸術に徹底するためには莫大な精神的物質的犠牲が必要なことと同時にそこでは時には人間関係をも敵視しなければならないこと、芸術家の生活には家族の情愛や団らんにも背を向けることを命ずる厳しさがあることであろう。思うに芸術における最高のものは偉大な芸術家の他のすべてを犠牲にした自己集中によって辛うじて勝ち得られるものであろう。この意味において、芸術家には一般の健康で幸福な世俗的生活が初めから拒否されているといえようが、Cather にあっては、それが例えば Thomas Mann におけるように、芸術家の側における世俗的人間に対するコンプレックスとなるようなことはなく、芸術との連りによつて人はより生を充実させられるという確信になつていた。Cather は、特に *The Song of the Lark* において、芸術家の生活を美化したり理想化したりすることなく、むしろ屢々その醜惡悲惨な面に目を向けることによって反つてその世界の真実に迫っているといえる。その典型的な場面は、例えば、オペラの代役を俄かに引き受ける場面で、遇々その場に居合せていた恩人 Doctor Archie が誰であるかも忘れて自分の身支度を手伝うよう命じたり、ドイツ留学中に母が重病に陥ったにもかかわらず、自分の芸術にとって重要なある機会のために帰国するのを拒否したりするという *egotism* と非情振りを示すあたりに印象深く描かれている。しかしそういう、一般人の目からすれば一見不道德な行為も芸術という目的のためにここ迄徹底すれば一種崇高な趣きをさえ呈するものであるといえるであろう。

VII

The Song of the Lark には芸術家の主として *philistinism* を対象とした戦う姿勢というものが見られるが、同じ音楽家をテーマにしても *Lucy Gayheart* はこの点著しく異っている。例えば音楽と現実との関係に視点をお

いて見ると、Lucy においても Thea の場合と同様、音楽が与える深い感動や恍惚の体験が語られているが、例えば Chicago の町で Thea がこの美しいもののために一生を戦い抜こうと自分にいいかせたあの積極的姿勢や逞しさは Lucy には認められない。彼女は音楽やそれに連なる美の世界が何時も現実という外部によって脅かされているかのように感じ、その不安を逃れるために Sebastian の許にゆくのである。

Lucyは田舎の幼な友達で彼女に目をつけている Harry Gordon が Chicago に遊びにくることに自分の世界の破壊者を見るように感じるが、結局は彼と数日を過すことになる。その時 Lucy は、最近自分が見付けた幸福が消え失せるのを感じるが、それはまるで陶酔的なメロディーを急に忘れてしまって、それが味わせてくれた気分や喜びは思い出せるが、メロディーそのものは甦ってこない時のような不安さなのである。感情などというものは Harry にはどうしてもよいものなのであり、彼を動かせるのは外的な状況であり、彼はその肉体の力で彼女が大切にしている実体のないあるもの——それは美へのあこがれであるが——を愚弄するため Chicago にやってきたように Lucy には思われるのである。しかしそういう Lucy という人間にはには、ある程度の信念や情熱があっても、Thea の目的意識に燃えた生き方に比べると、何んともなくムードの中を浮遊している感じのひ弱さがあることは否めないのである。

こうした Thea と Lucy の差を象徴するものとして彼女等に感銘を与える音楽の性格があることに注目したい。Thea には「新世界交響曲」が最初の感動として与えられるが、その曲の標題はいかにも Thea の将来の可能性を暗示しているかの如くである。一方 Lucy の最初の感動は Schubert の歌曲集 *Schwanengesang* 中の凄惨な失恋の歌 *Der Doppelgänger* と Sebastian がアンコールする Byron の詩につけた *When We Two Parted* である。そうしてこの二曲はこれまた Lucy とこの芸術家の将来を暗示したものとなっているのである。

さらに *The Song of the Lark* を Lucy Gayheart と対照的にしている要素としては、前者の Harsanyi に対する後者の Sebastian の対比的存在が

VIII

上にも触れたように、*The Song of the Lark* のヒロイン Thea には敵もあったが味方もあった。Wunsch, Archie, Ray, Harsanyi 等はいわば幾分リレー式にそれぞれの方法において Thea の力となってゆくのであり、その何れが欠けていても Thea の成功は非常に困難を増したであろうと想像される。この中でも特に音楽や芸術と深く関わるわけではないが、Thea の一般的な人生上の指導という点で最も重要な存在は医師でインテリの Archie であろう。Thea との関係が一番長いというばかりでなく、医者として一般的な教養に優れ、また音楽に特に深く関わっていないことが、彼に専門的技術的瑣末に捉われない一種の円満な見識を彼に与えていて、万事につけ Thea に最も信頼されていた存在となっていた。彼女が帰米後 Thea に初めて接したのが、彼女が *Lohengrin* の Elsa 役で歌った時であるが、そのコンサートの途中で、Archie が Thea に対して持っていた個人的所有権者としての誇りがすっかり彼の中から閉め出されてしまうという経験は、彼が如何に Thea に対して強い連りを持っていたかを証明するものである。そうして、先の引用にもあったように、彼女が成長してゆくのを見るのが最高の喜びであったと告白するのを、これは彼が異常性格の妻を持ち、また子無しであるということからくる自分の欲求不満をこのような形で充足させたものであり、その動機には egoistic なものがあると考えるのも全面的には否定できないが、しかし Archie に見られるような永続性のある、しかも冷静を失わない献身振りはやはりより人間的教育的な純粋な動機に基いた行為であると見るのが正しいであろう。もともと Cather には教育者の乃至は啓蒙家の風貌がかなり認められるが、Archie のこの長篇での役割りは彼女のこうした一面を担っているようである。教育家 Cather を示す最も典型的な話として、彼女が Paris 滞在中に知り合った有名な音楽一家 Menuhin 家の三人の子供達が、外国旅行が多くて、どの一国の言葉をもマスターできないのではないかと心配した彼女が、彼等のために Shakespeare Club を作り、彼等に文学趣味を植付けることに成功したというのがあ

¹⁾
 だが、この話でもう一つ重要なことは、この読書会のため当時既に廃れつつあった Temple 版を三部、散々苦勞した挙句古本屋で探し当てて、子供達の一人一人に持たせてやったということで、これは如何にも作家として、また教育者としての Cather の厳しさと良心を物語るものであるといえる。このような Thea と Archie の関係をより鮮明に浮き出したものとしては他に *Old Mrs. Harris* の Vickie と Rosen 夫妻との間の関係が思い起されるであろう。Cather 自身は十七才頃に、後に Wunsch のモデルとなる Schindelmisser という老教授にピアノを習ったが、演奏技術を習得することによりもドイツ本国の町や慣習や言葉の方に余計興味を持ってこの老先生を悩ませたという。²⁾このことは如何に Cather の音楽に対する共感が深かったといっても、それが文化乃至は芸術全般に亘る興味、つまり彼女の中の作家や教育者としての 'desire' を圧する所迄はゆかなかったことを示している。Cather にあって音楽は、文化全般、特に旧大陸のそれを自己の中に同化させるための強力だけれども唯一ではない具体的な絆に過ぎなかったようである。

(注)

S. は *The Song of the Lark*, Hamish Hamilton 1963. を示す。

L. は *Lucy Gayheart*, Hamish Hamilton, 1962. を示す。

B.E. は Bawn, E.K. (completed by Leon Edel) : *Willa Cather : a Critical Biography*, New York, Alfred A. Knopf, 1953. を示す。

M.B. は Bennett, Mildred R. : *The World of Willa Cather*, Lincoln : University of Nebraska Press, 1961. を示す。

Ⅲ ①S., p.548. ②S., p.48. ③S., p.552.

Ⅳ ①M.B., p.209. ②M.B., p.165. ③S., p.51. ④S., p.99. ⑤S., p.177. ⑥S., p.306 ⑦L., p.94.

V ①M.B., p.209 ②M.B., p.152. ③R., p.511. ④M.B., p.212 ⑤M.B., p.211. ⑥S., p.219, ⑦cf. IV, ⑤. ⑧S., pp.272-273. ⑨S., p.251. ⑩S., p.V. ⑪ M.B., p.209. ⑫S., p.549. ⑬M.B., p.209. ⑭B.E., p.180. ⑮S., p.271/p.550. ⑯S., p.378. ⑰K., p.183.

Ⅵ ①M.B., p.148. ②S., p.254 ③M.B., p.148. ④L., p.42. ⑤S., p.550.

Ⅶ ①M.B., p.151.

Ⅷ ①BE., p.300. ②M.B., p.153.